九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

沖縄出土滑石混入系土器からみた東シナ海の対外交流

宮本, 一夫
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

https://doi.org/10.15017/1468021

出版情報：史淵. 151, pp.63-84, 2014-03-14. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院人文科学研究院
『 史 淵 』第 151 輯 抜 刷
２ ０ １ ４ 年 ３ 月 発 行

沖縄出土滑石混入系土器からみた東シナ海の対外交流

宮 本 一 夫

沖縄出土滑石混入系土器からみた東シナ海の対外交流

宮　本　一　夫

1　はじめに

沖縄には滑石が混入された楽浪系土器が出土している。これは日本列島ではほとんど出土しないものであり、いわゆる楽浪系花盆形土器（宮本2012）とも異なっている。同じように本土ではほとんど出土したことがない明刀銭にみられる燕系遺物も出土している。戦国燕や漢代の楽浪郡と沖縄が本土を介さないで何らかの交流がなされていたのではないかと思わざるを得ない遺物群である。

このような楽浪系土器は沖縄では貝塚時代後期前半の遺跡から出土しており、弥生土器との共伴が見られる場合もある。その点では、列島の弥生文化と戦国燕や漢代楽浪との相対年代を考える上で重要な遺物群であると言うことのできるものである。沖縄を介して九州と大陸との接点を見出すことができる可能性がある。

ところで、沖縄出土の楽浪系土器に関しては、滑石を混入しているものの、楽浪郡に見られる花盆形土器と異なり、むしろ遼東半島の戦国時代後期の牧羊城出土の滑石混入系土器に近似しているという指摘（大貫ほか2008、小林ほか2013）がある。必ずしも楽浪郡や楽浪時代のものとすべきでない可能性が出てきたのである。そこで、沖縄出土のいわゆる楽浪系土器を滑石混入系土器と呼び、その大陸での位置づけを行う必用がある。それは年代問題だけではなく、沖縄出土滑石混入系土器の製作地を特定する必用があるためである。

本稿ではまず沖縄出土滑石混入系土器そのものを検討した後、それら滑石混入系土器の大陸での位置づけを行いたい。滑石混入系土器は牧羊城土城など遼

東から楽浪郡治の朝鮮半島北部にまで認められ、それらの地域の滑石混入系土器編年を行うことにより、沖縄出土滑石混入系土器の位置づけが可能になる。さらには、沖縄で共伴する弥生土器から東北アジアにおける相対編年への一助としたい。最後に、滑石混入系土器とほぼ同じ時期の大陸系文物と考えられる明刀銭や三稜銅鏃の検討を行うことにより、沖縄におけるこれら文物の登場の背景を探ってみることとする。

2　沖縄出土滑石混入系土器の検討

これまで沖縄で出土した滑石混入系土器は、宜野湾市真志喜荒地原第1遺跡（宜野湾市教育委員会編1989）、浦添市嘉門貝塚B区（下地1999）、読谷村大久保原遺跡（仲宗根ほか2001）で発見されており、沖縄本島の北西海岸部に限られて出土している（図1）。しかもこれらが貝塚や砂丘地の遺跡であるように、海に面した遺跡であり、内陸部の遺跡ではないところが特徴的である。

荒地原第1遺跡出土の滑石混入系土器（図2-7）は、1989年に沖縄で初めて発見されたものであり、「脂感のある滑石様の鉱物（未同定）を雑に混和した口縁内弯の著しい土器」と記述されている（宜野湾市教育委員会編1989）。口縁部に断

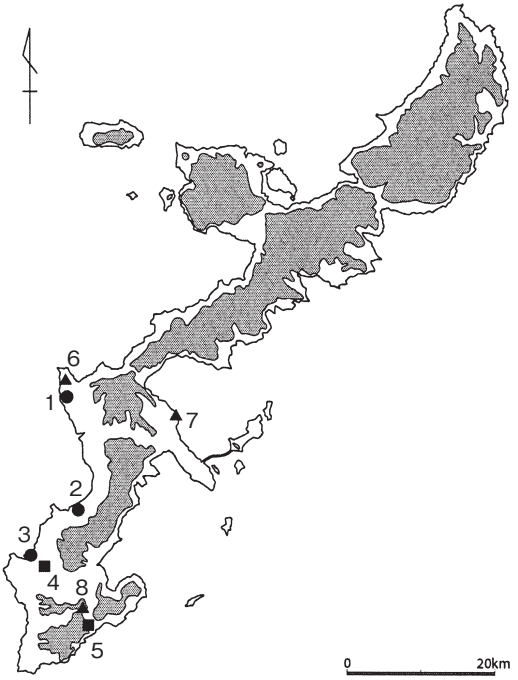

図1　燕系遺物の出土地　●滑石混入系土器、■明刀銭、▲三稜銅鏃（1大久保原、2荒地原、3嘉門、4城岳、5具志頭城、6浜屋原、7宇堅、8新里
縮尺100万分の1）

面方形の粘土帯を貼ったようにして口縁端部を肥厚させるもので、口縁端部内面も鋭角的に角をなして稜線を形成している。これを沖縄滑石混入系土器1式と呼んでおきたい。荒地原第1遺跡では、滑石混入系土器と共伴する遺物を特定するのは難しいが、胴部に微隆帯を貼り付けた弥生土器壺（図2-8）と思われる土器が出土している。北部九州で言う城ノ越式土器壺に類似しており、南九州では入来Ⅰ式に相当するものであろう。必ずしも共伴関係を保証するもの

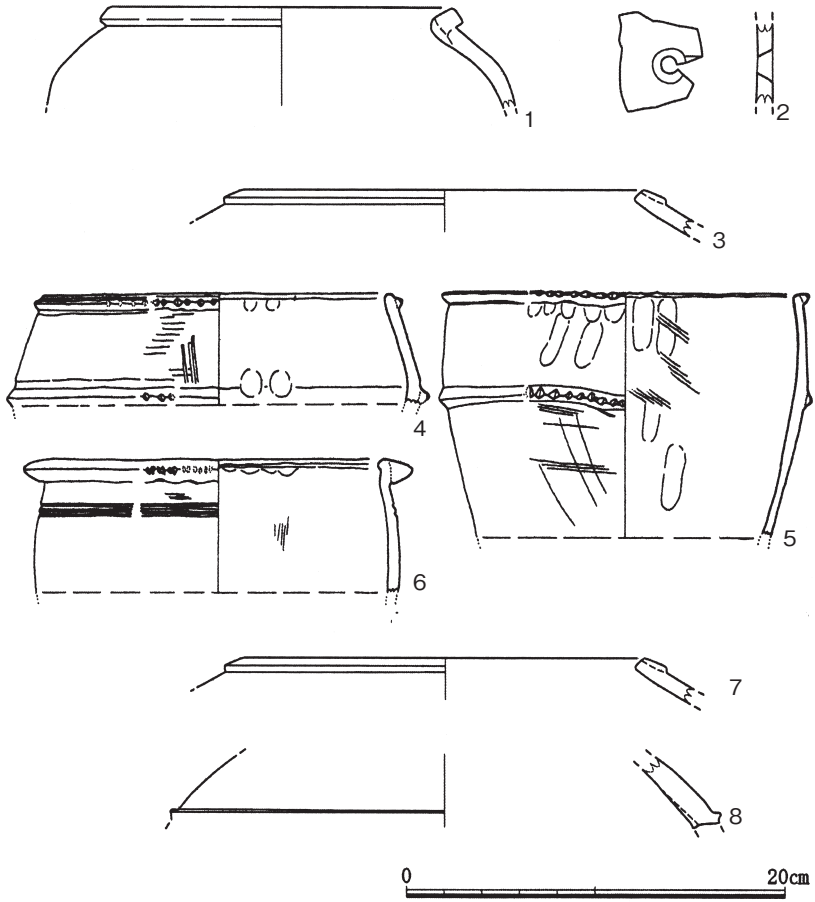

図2　荒地原第1遺跡・嘉門貝塚B区出土滑石混入系土器と弥生土器
（1～6嘉門B、7・8荒地原第1　縮尺1／4）

ではないが、後述する他遺跡の弥生土器の共伴関係とは矛盾しないものである。

嘉門貝塚B区で楽浪系土器として紹介された（下地1999）滑石混入系土器（図2-3）は、荒地原第1遺跡の滑石混入系土器と同じように、口縁部が内湾し、口縁端部に粘土帯を貼り付けることにより肥厚するものである。また、口縁端部内面は角をなすものであり、荒地原第1遺跡のものに類似している。沖縄滑石混入系土器1式である。この他、嘉門貝塚B区出土の滑石混入系土器には、これまで報告されていないものが2点存在する。一つは同じように口縁部が内湾し口縁端部が肥厚するものであるが、口縁端部内面の稜線は存在せず、口縁端部外面だけでなく内面もやや肥厚気味のものである（図2-1）。これを沖縄滑石混入系土器2式として1式と区別したい。もう1点は胴部破片資料であるが、補修孔と思われる土器製作後の穿孔が存在するが、型式不明である（図2-2）。

嘉門貝塚B区からは、弥生前期から平安時代に相当する高宮暫定編年後期Ⅰ～Ⅳ期（高宮1978）の土器とともに、位置づけの難しい在地土器が主体的に出土している（浦添市教育委員会1993）。在地土器の内、Ⅲ類と呼ばれる在地土器の出土位置に近いところから、滑石混入系土器が出土している（下地1999）。このⅢ類土器は今日で言う阿波連裏下層式に相当するものであり(1)、南九州の弥生時代前期末（高橋Ⅱ式）～中期前葉（入来Ⅰ式）に併行すると考えられている（新里1999）。そこで、これらに共伴している弥生土器から滑石混入系土器の年代を推定してみたい。

嘉門貝塚B区からは南九州のいわゆる刻目突帯文土器が出土している。ここでは年代観を指摘しやすい甕型土器について検討してみたい。二条突帯文で逆くの字状口縁を呈し、口縁端部からやや降った所に突帯を貼りV字刻目を施すもの（図2-4）。同じく二条突帯文でありながら頸部の屈曲が弱まり、口縁に接するように突帯を貼り小V字刻目を施すもの（図2-5）が見られる。前者は高橋Ⅰ式に、後者は高橋Ⅱ式～入来Ⅰ式にかけての特徴（藤尾1993）を示している。また、断面三角形に近い口縁を頸部端部に接して貼り付け、頸部には多条沈線や隆帯が施されるものがある。頸部沈線文（図2-6）が入来Ⅰ式であり、頸部隆帯が入来Ⅱ式であろう（中園1997）。この他、弥生式土器壺も出土

しているが、これらの時代に並行する段階のものである。したがって、嘉門貝塚B区は弥生前期の高橋Ⅰ式～弥生中期中葉の入来Ⅱ式までが存在していることになる。この中でも、入来Ⅰ・Ⅱ式段階の土器出土量が多い。また、阿波連浦下層式との共伴の可能性を考えれば、入来Ⅰ式を中心とする前後の時期に滑石混入系土器が並行している可能性が高いと言えよう。

同じく大久保原遺跡からも、内湾口縁で口縁が肥厚し口縁端部内面が角をなす沖縄滑石混入系土器1式（図3-1）が出土している。また、内湾口縁で口縁端部内面が丸みを帯び、かつ口縁端部外面が肥厚する沖縄滑石混入系土器2式

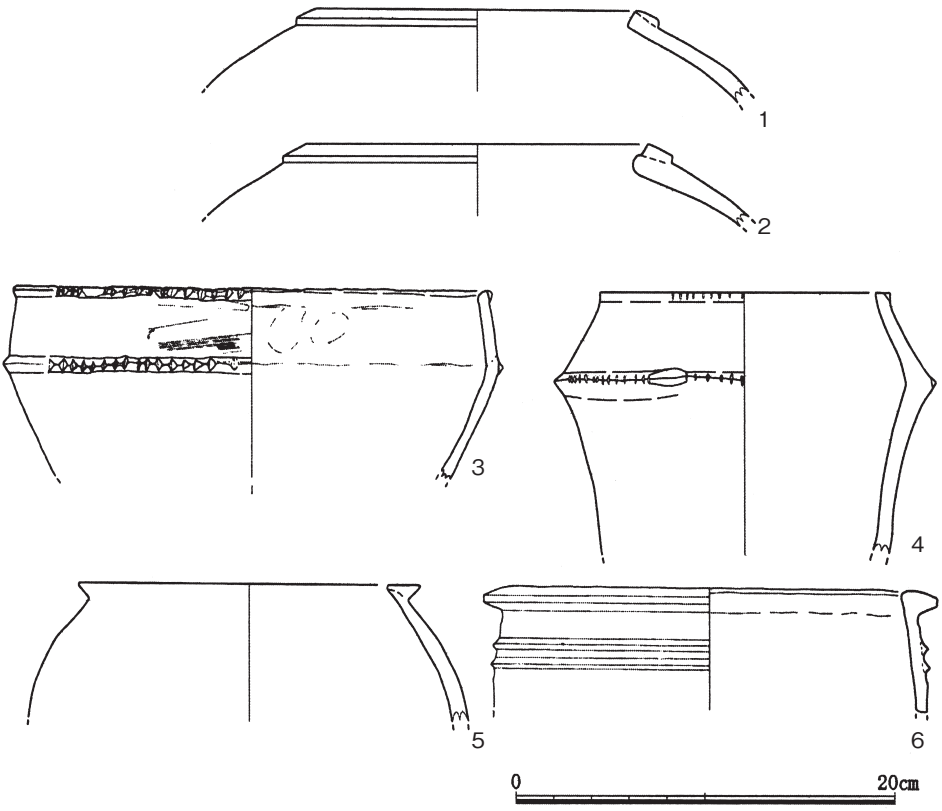

図3　大久保原遺跡出土滑石混入系土器と弥生土器（縮尺1／4）

（図3-2）も存在している。

ここ大久保原遺跡でも南九州の弥生土器が共伴している。2条の刻目突帯文土器であるが、口縁端部の突帯は僅かに粘土帯が貼られるものであり、2条突帯の刻目はＶ字形をなす（図3-3）。南九州の高橋Ⅱ式から入来Ⅰ式の特徴を示している（藤尾1993）。また、いわゆる刻目突帯文土器であるが、2条の突帯はなく、口縁端部に刻みが施されかつ頸部屈曲部に刻みが施されるものがある（図3-4）。2条の突帯文が退化した形態をなし、刻みもＶ字状をなすものの刻み目幅が狭い退化形態を示している。これは南九州に見られる弥生中期初頭の入来Ⅰ式に属する深鉢（藤尾1993）であろう。また、共伴する甕は口縁に断面三角形状の粘土帯を貼って平坦に仕上げるもの（図3-5）であり、南九州の山ノ口式と考えられている（仲宗根ほか2001）が、口縁端部の形態はむしろ弥生中期前葉の特徴を示している。したがって、滑石混入系土器は、弥生中期初頭を中心とする中期前半に併行する可能性が高いと考えられる。

このように共伴する弥生土器はその出土量からすれば、南九州の高橋Ⅱ式～入来Ⅱ式までに限られている。この中でも入来Ⅰ式の共伴頻度が高いものであり、弥生中期前葉に主体があるとすることができるであろう。こういった段階に、沖縄滑石混入系1式・2式土器が共伴している可能性が高い。そしてまたこの事実は、弥生土器と韓半島の土器編年の併行関係から言って、白井克典も指摘するように楽浪郡時代のものではなく、それより古い衛満朝鮮時代以前になるのである（白井2001）。そこで、滑石混入系土器そのものの年代的位置づけを示す必要がある。以下、滑石混入系土器の編年的な位置について、遼東から朝鮮半島西北部において検討してみたい。

3　滑石混入系土器の東北アジア的な位置づけ

楽浪出土の土器で、土器胎土の混和剤として滑石を混入するものを滑石混入系土器としてまとめたのが鄭仁盛である（鄭仁盛2004）。楽浪の滑石混入系土器には、鼎形土器、花盆形土器、深鉢形土器、浅鉢形土器、大甕・大壺などからなる。沖縄出土のものは、口縁が肥厚し内湾するものであるが、胴部や底部

が明確でないため、全体形は知られないが、楽浪のものでこれに一番近いものは深鉢形土器とされるものであろう。花盆形土器の起源として遼東式釜を提起した（宮本2012）が、沖縄出土のものは口縁部形態からしてそれらとは異なっている。

遼東式釜（図4-1）は、内面に布圧痕が施されているように、型作りの痕跡が明瞭である。これまで牧羊城遺跡での僅かな出土例を示していたように、口縁部近くまで型作りで成形され、その後、口縁が付け足されるように製作されるものである（宮本2012）。全体的な器形は丸底の釜の形態をなしていると想定されるが、これが美林里遺跡出土の丸底からその一部が平底になった花盆形土器1式（図4-2）に繋がるのである。

この様な花盆形1式を生み出す遼東式釜に関しては、粘土帯を貼った状態が良く残る遼東式釜Ⅰ式からくの字状口縁になる遼東式釜Ⅱ式の変化を考えた（宮

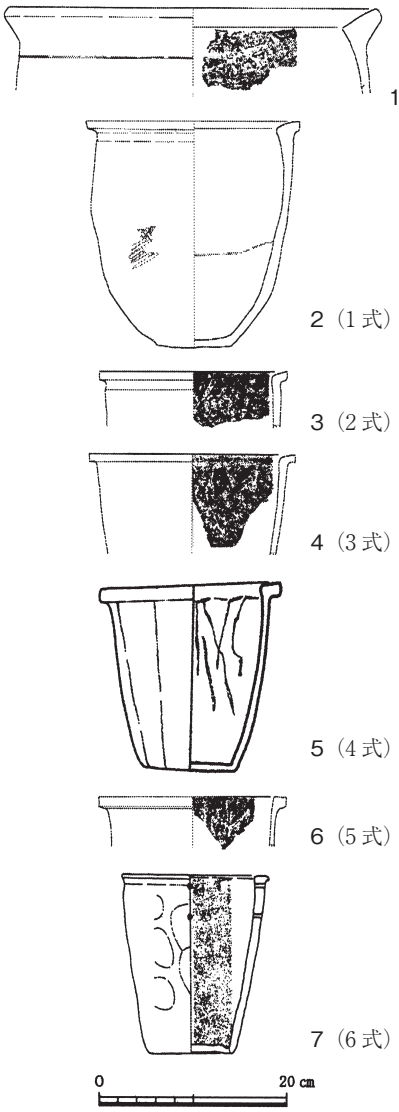

図4　滑石混入系土器花盆形土器の変遷（縮尺1／8）

本2012)。ところが、東京大学所蔵の楽浪土城の滑石混入系土器の中には、これとは異なったいわゆる燕式釜に口縁部形態が類似しているものの、型作りで胴部以下を作った深鉢形土器が存在している。図5がそれを示したものである。鄭仁盛はこれらを花盆形土器Ⅱ型として花盆形土器に含めている（鄭仁盛2004）が、むしろ口縁部を中心とする器形の特徴からからすれば、燕式釜に当てはめるべきであろう。図5-1は、口縁部が段をなして屈曲する燕式釜Ⅰ式の特徴を示している。胴部上段には粘土帯の継ぎ目が土器内面に明瞭に示されるが、その継ぎ目以下に布の絞り込み痕が認められ、布目圧痕と同じように型作りであった可能性を示している。図5-2も、口縁が内湾気味に段をなす燕式釜Ⅰ式の特徴を示しており、胴部内面に認められる粘土帯の継ぎ目以下には明瞭な布目圧痕が認められ、型に布が巻いてあったことが明瞭である。型に粘土を当てて土器を成形した型作り成形の土器であることを示している。これもおそらく丸底であったであろう。さらに図5-3は、口縁が内湾気味に直線的にくの字形を示す口縁部であり、口縁部の特徴は燕式釜Ⅱ式を示している。また、胴部内面の粘土帯の継ぎ目以下に明瞭な布の皺が認められ、これも型に布を当てた型作り成形で土器下端部が作られたことを知ることができる。

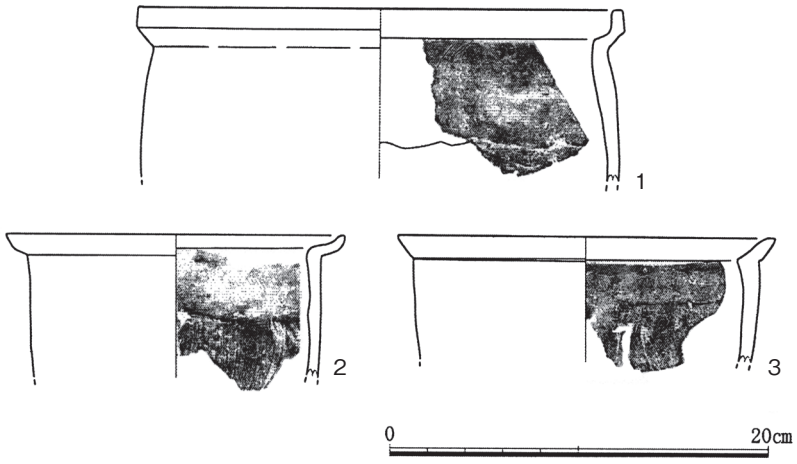

図５　楽浪城址出土燕式釜（縮尺１／４）

以上のように、滑石を胎土に混入させた特徴など正に燕式釜の特徴を示すだけでなく、口縁部形態も燕式釜の形態的特徴（宮本2004）を引いており、燕式釜Ⅰ式からⅡ式までの変化をそのまま辿っている。ただし、燕式釜に少ない胴部以下を型作りで成形した(2)後、粘土帯を用いて口縁部を作り出す手法は、燕国や遼東の燕式釜に見出されない地域的な成形技法であるということができよう。すなわち、形態は燕式釜を追究しながらも、土器の製作技術は遼東式釜の技術を引くものであり、二つの土器系譜の折衷形態を示している。これが楽浪土城で製作されているところが重要であり、これを仮に楽浪系燕式釜と呼んでおきたい。楽浪土城は一般的には、前108年の楽浪郡治設置以降の土城と考えられていたが、楽浪土城の瓦を分析した中村亜希子によれば、一部の瓦には統一秦や前漢初期の瓦当文様や製作技術を持つものがあり、衛満朝鮮時期まで遡る段階から瓦が用いられたことを論じている（中村2012）。これは楽浪土城の土器が衛満朝鮮時期あるいは統一秦期まで遡る可能性を示しており、楽浪系燕式釜はこの段階のものであった可能性があろう。この議論が可能であれば、花盆形土器2式をこれまで楽浪郡治設置以降と考えていた（宮本2012）ものを、それ以前に遡らせることも可能となってきた。これにより花盆形土器1・2式が前2世紀、花盆形土器3・4式が前1世紀、花盆形土器5・6式が後1世紀というふうに、花盆形土器2式の年代を若干朔上させて見ることもできるであろう。いわゆる楽浪郡設置以後が花盆形3式であるが、大楽浪設置の前75年以降を花盆形4式と考え、この段階から韓半島南部や壱岐まで分布の拡大が認められる（宮本2012）。

さて、問題の滑石混入系土器深鉢について検討することにしよう。口縁が内湾し、楽浪土城で復原されたもの（図10-5）は丸底気味ながら平底をなすものであり（谷1986）、底部形態は狭い平底をなすものと想定される。これは胴部や胴部下半から布目痕跡が残っているように、胴部は型作りによって製作されている。同じように、滑石混入系土器で胴部（図6-4）や底部付近（図6-5）の土器内面に布圧痕が残る例は、牧羊城遺跡の出土遺物にも存在している。牧羊城遺跡でも型作りによって胴部下半部が製作されているが、これらに

伴う口縁部が図6の1～3に示すように、沖縄出土の滑石混入系土器の口縁部に類似したものである。このように、滑石混入系土器深鉢は牧羊城遺跡と楽浪土城どちらもにも認められるが、口縁部形態を異にしている。

牧羊城遺跡の滑石混入系土器深鉢は、内湾する口縁に粘土紐を貼り足すこと

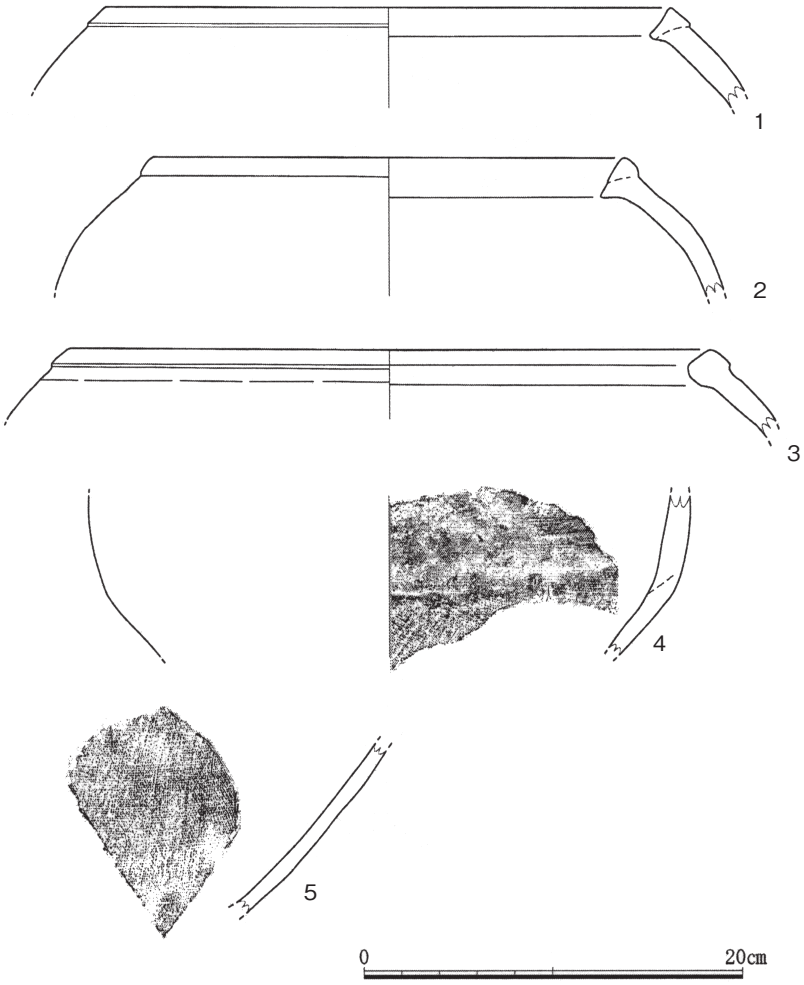

図6　牧羊城遺跡出土滑石混入系土器深鉢（縮尺1／4）

により、口縁端部が若干肥厚するものである（図6-1～3）。一方、楽浪土城出土の滑石混入系土器深鉢は、口縁が立ち上がるもの（図7-1～3、図8-1・2）で、両遺跡の滑石混入系土器深鉢の口縁部形態には差違が見出される。楽浪土城のものは、一般的には前1世紀以降の楽浪郡治成立以降と推定されるが、瓦の分析から前2世紀の衛満朝鮮期まで遡る可能性がある。一方で、牧羊城遺跡は戦国後期の前3世紀から始まっている（大貫編2007）。そして、これらの土器は鄭仁盛によって牧羊城2、3類の2群土器と分類されており、戦国後期ないし前漢初期のものと推定されている（大貫ほか2007）。したがって、牧羊城遺跡の滑石混入系土器深鉢の方が古い可能性が想定できるのである。これに基

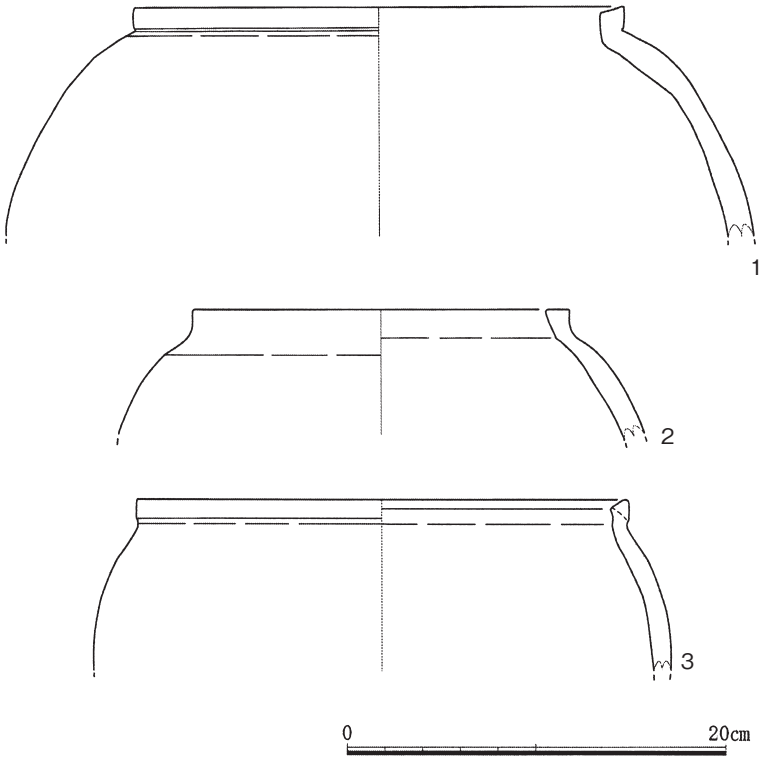

図7　楽浪城址出土滑石混入系土器深鉢（縮尺1／4）

づき、滑石混入系土器深鉢の口縁部形態の変化方向を想定してみたい。

牧羊城遺跡出土滑石混入系土器深鉢と、楽浪土城出土の滑石混入系土器深鉢とを比較すると、口縁が内湾し口縁端部が肥厚するものから、次第に口縁の肥厚が弱まるとともに口縁が立ち上がって行き、最終的には口縁が直口気味に立ち上がる変化を想定することができる。この過程をⅠ～Ⅵ型式の変化で説明することができる。Ⅰ式は内湾口縁で口縁端部に粘土帯を貼ることによって幾分肥厚するものであり、口縁部内面に稜線が存在する（図6-1・2)。Ⅱ式はこの口縁部内面の稜線がなくなり、口縁端部が断面方形をなし口縁外面も僅かに段状に肥厚するものとともに、口縁端部内面が丸みを帯びるものである（図

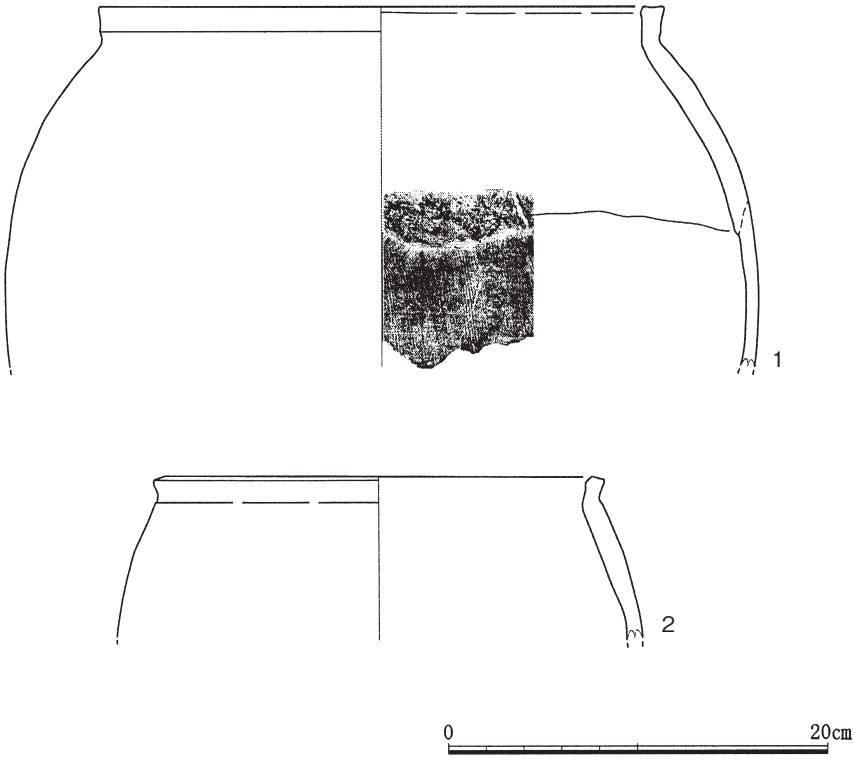

図８　楽浪城址出土滑石混入系土器深鉢（縮尺１／４）

6-3)。Ⅲ式は、口縁が肥厚せず口縁が僅かに直口気味に立ち上がるが、やや口縁内面が斜行するものである（図7-1・2)。これに対し、口縁が直立気味に立ち上がり、かつⅢ式ほど頸部が内湾しないものがⅣ式である（図7-3)。さらに口縁が完全に直立するものがⅤ式である（図8-1)。そして口縁が若干外反気味になり、さらに頸部もⅤ式より撫で肩になるものがⅥ式である（図8-2)。そして内湾口縁が次第にくの字形口縁と変化する方向にⅠ式からⅥ式まで系統的に変化していくものと想定される。

この他、滑石混入系土器深鉢は北朝鮮平安南道大同郡秋乙美林里遺跡にも認められる。京都大学総合博物館が所蔵する美林里遺跡の出土品は、発見日時や発見の経緯など、全く不明である。新石器時代の櫛目文土器や青銅器時代のコマ形土器を除くと、図9のような土器が出土している。これらはいわゆる楽浪系土器であるが、同時期のものであるかは判断できる根拠がない。この内、滑石混入系土器深鉢は口縁部しか残っておらず（図9-1)、胴部下半から底部が型作りであるかは不明であるが、口縁は内湾し、口縁端部は直線気味に立ち上がりながら、口端部が内側に傾いているものであり、滑石混入系土器深鉢Ⅲ類の特徴を示している。この他、いわゆる泥質灰陶の直口壺が存在する。一つは口縁端部が肥厚し、胴部外面には平行叩きが施され、胴部内面にも当て具の痕跡が明瞭なものである（図9-2)。もう一つは口縁が直口して立ち上がり、胴部外面には細かな縄蓆叩きが認められるが、内面には叩き痕は認められない(図9-3)。直口する口縁には平行叩きを消した痕跡があり、また頸部外面にも平行叩きが存在している。前者の肥厚する灰陶壺は、楽浪土城址では認められないところから、衛満朝鮮期かあるいはそれ以前に遡るものである。鄭仁盛も、この型式の灰陶壺を前漢併行期に位置付けている（鄭仁盛2011)。衛満朝鮮期の前2世紀と考えておきたい。後者は朝鮮半島や日本列島でも出土品があるように、楽浪郡設置以降に出土するものであり、前1世紀～後2世紀のものと考えておきたい。このように、美林里遺跡出土の楽浪系土器は、衛満朝鮮期以降のものであり、前2世紀～後2世紀のものと考えられる。

以上の遺跡間の型式の出現頻度から見るならば、先の口縁部の変化を中心と

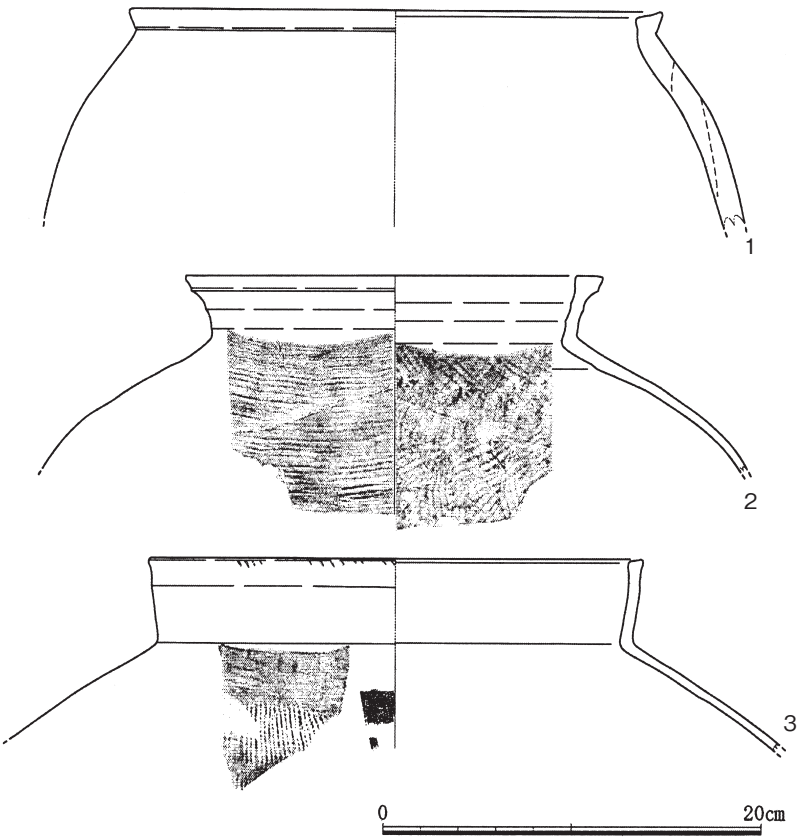

図９　美林里遺跡出土滑石混入系土器深鉢と灰陶直口壺（縮尺１／４）

する滑石混入系土器深鉢の型式変化は、妥当と言うことができよう。図10に示すように、内湾口縁端部の外面の肥厚（Ⅰ式）から、口縁端部外面が肥厚しながら口縁端部内面が丸みを帯び（Ⅱ式）、直口するようにやや内傾し（Ⅲ式）、そして直線的に口縁部が次第に延び（Ⅳ・Ⅴ式）、口縁がくの字状口縁の様に外反する（Ⅵ式）とともに、さらにⅠ式からⅥ式に向かって口縁の内湾度が弱まり、胴部の最大径が下降するように変化する。Ⅰ・Ⅱ式は丸底である可能性があり、少なくともⅤ式では平底となり、さらにⅥ式で平底が発達するものと

想定される。

このような滑石混入系土器深鉢の型式変化において、牧羊城遺跡からはⅠ・Ⅱ式、楽浪土城址ではⅢ～Ⅵ式が出土しており、一定の時間差を示している。美林里遺跡出土の滑石混入系深鉢はⅢ式であり、美林里遺跡出土の土器を衛満朝鮮期以降のもの（宮本2012）とするならば、Ⅲ式は前2世紀以降のものとなる。さらに牧羊城遺跡が戦国後期以降のものとするならば、Ⅰ・Ⅱ式は前3世紀～前2世紀初頭のものとすることができよう。そして、Ⅲ式～Ⅵ式が前2世紀～後2世紀の中に位置付けることができるであろう。また、楽浪土城が衛満朝鮮期以降には既に存在していた（中村2012）とすれば、この年代観も妥当なものとなる。

これら滑石混入系土器の花盆形土器も、胴部過半が型作りであり、型作りで胴

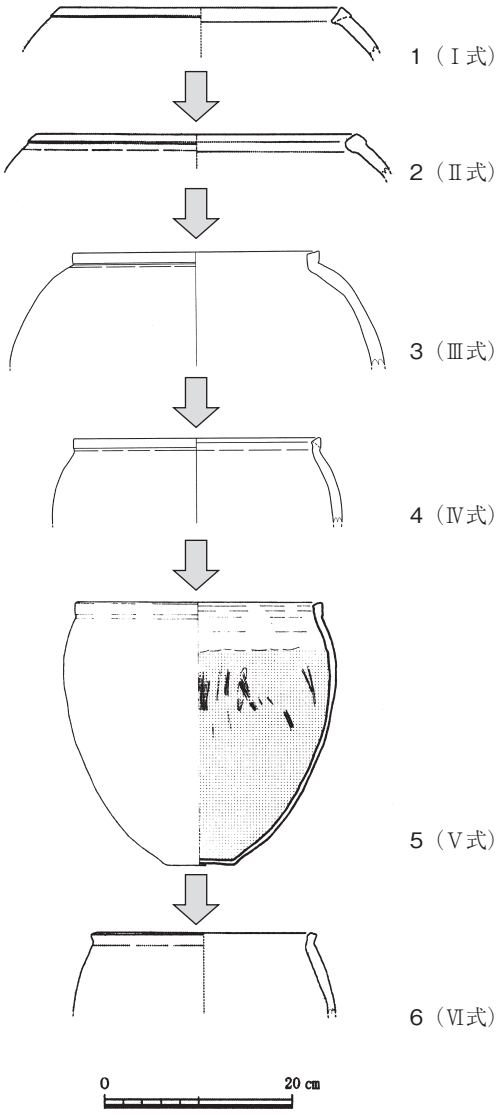

図10　滑石混入系土器深鉢の変遷図
（1・2牧羊城、3～5楽浪　縮尺1／8）

部以下を製作して後、口縁部に粘土板を貼り足して口縁部を成形するものである。製作技法的には、遼東式釜の製作を引くものである。また滑石混入系土器深鉢も、遼東で遼東郡設置以降に在地土器と燕系土器の製作技法の融合の中で生まれたものと考えられる。そして、遼東式釜や滑石混入系土器深鉢は、平城付近に建国された衛満朝鮮とともに燕系移民の手で西北朝鮮にもたらされたものである。衛満朝鮮期に遼東式釜は花盆形土器1式に変化し、滑石混入系土器深鉢はⅢ式以降の変化を果たすことになる。

さて、沖縄出土の滑石混入系土器1・2式は、この型式変化の中でも滑石混入系土器深鉢Ⅰ式やⅡ式に最も近接したものである。沖縄出土滑石混入系土器1式が滑石混入系土器深鉢Ⅰ式に、沖縄出土滑石混入系土器2式が滑石混入系土器深鉢Ⅱ式に相当し、前3世紀～前2世紀初頭に位置付けられる。したがって、沖縄出土の滑石混入系土器は楽浪時代のものではないとともに、衛満朝鮮期のものでもないということができる。遼東の戦国後期から統一秦期のものであるということができるであろう。典型的な花盆形土器である前2世紀以降の花盆形土器1式が沖縄において出土していないことも、滑石混入系土器Ⅰ・Ⅱ式の年代観の傍証とすることができよう。

4　沖縄出土燕系遺物の検討

この様に、沖縄出土滑石混入系土器が遼東の前3世紀から前2世紀初頭のものと考えられるが、それは燕から統一秦ないし前漢初頭の年代に相当している。沖縄ではこの時期でかつ遼東出土のものとして、燕の明刀銭が知られている。また沖縄で出土した三稜銅鏃も日本国内の出土例で比較しても比較的まとまって出土しており、しかも楽浪郡時代よりも古い燕系遺物の可能性がある。これら燕系遺物について検討してみたい。

燕の明刀銭は、那覇市城岳貝塚（橋本1928）や具志頭城北東崖下洞穴（當眞1997）から出土している。城岳貝塚（図11-1）や具志頭城出土のもの（図11-2）は、ほぼ同じ大きさであり、明刀銭の刃部と柄部の折れ曲がり部分が既に鈍くなっている段階の形態的特徴を示す。銘文の「明」の部分は、本来

「匽」に相当する「日」「女」からなる（石永士・王索芳1983）が、既にどちらも本来の字体をかなり逸しているものである。

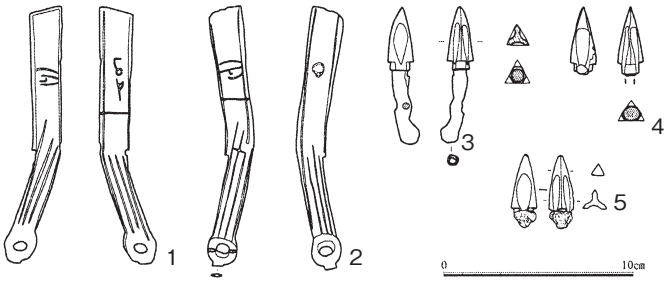

図11　沖縄出土燕系遺物（1城岳、2具志頭城、3新里洞穴、4浜屋原、5宇堅　縮尺1／4）

また、刃部と柄部の境の段部がかなり不明瞭化しており石永士らが分類するⅤ式に相当している（石永士・王素芳1983）。あるいは燕下都出土明刀銭の分類でいうⅥ式に相当する（石永士・石磊1996）。したがって、戦国時代後期のものである。

一方で、これら明刀銭の「明」の字はかなり字体が崩れており、燕下都出土明刀銭Ⅵ式より崩れており、遼東郡などの地方で製作されたものの可能性が考えられる。裏面の管理機構を示すと思われる背文も字体が崩れている。城岳のものは「□左」、具志頭城のものは「中」と読んでおくが、いずれにしてもかなり字体が崩れており、中央での製作を考えることができない。戦国後期の遼東郡での製作ないし、戦国燕より新しい段階での製作の可能性もある。

このように、沖縄出土の明刀銭は、基本的にはすべて戦国後期段階の最も新しい段階のものである。前3世紀後半のものとすることができるが、こうした貨幣が戦国燕以降に使用された可能性があり、それは前漢初頭の燕侯が封建された段階あるいはその直後までであろう。また、明刀銭の分布はほぼ清川江以北に限られ（古澤2010）、清川江が戦国燕の領域の東限である文献で言う「浿水」にあたると言うことができるであろう。明刀銭の分布からすれば、戦国燕にその流通は限られ、衛満朝鮮期までは存続しないことになる。したがって、沖縄出土の明刀銭の年代は前3世紀後半が主体であり、下っても前2世紀初頭までということになる。

また、沖縄本島からは三稜銅鏃が出土している。具志川市宇堅貝塚（大城1990）、読谷村浜屋原貝塚B地点の出土品（仲宗根・小原2006）や八重瀬町新里洞穴採集品（仲座・羽方2011）である。これら（図11-3～5）は茎が断面六角形であり、切り込みが3面に施され、しかも比較的大きい切り込みをなす。また、すべてが鉄製の鉄鏃をなすものである。鄭仁盛の分類（鄭仁盛2002）に従うならば、AId2類に属するものである。日本で出土する三翼銅鏃や三稜銅鏃（小田2000）には認められない型式の三稜銅鏃である。

これら沖縄出土三稜銅鏃の型式は、楽浪土城には認められない型式である。楽浪土城の主たる三稜銅鏃はAI式からなるが、沖縄出土のものと完全な同型式は存在しない。前113年没の中山王劉勝の墓である満城漢墓1号墓の三稜銅鏃は、切り込みが1面で茎断面が六角形からなるもので、楽浪土城の主体の三稜銅鏃と同型式である（中国社会科学院考古研究所1980）。三稜銅鏃の型式変化からしても、沖縄出土三稜銅鏃は楽浪郡設置や満城漢墓1号墓以前のものとすることができる。したがって、実年代で言えば、遅くとも前2世紀後葉以前のものであるとすることができるであろう。

また、沖縄出土三稜銅鏃は北方青銅器に属する三稜銅鏃（宮本2013）とも異なり、燕下都での出土例はない。切り込みはないが他の属性は同じである鄭仁盛分類のAIa2類が、戦国後期の燕下都高陌村2号遺址（河北省文物研究所1996）に存在している。一方で、沖縄出土のAId2類は、戦国後期～前漢の牧羊城土城（東亞考古学会1931）にも僅かに認められる。AIa2類からAId2類へ、すなわち切り込みのないものから切り込みのあるものへ変化すると想定できるところから、AId2類は統一秦期前後のものとすることができるであろう。さらに、AId2類は前2世紀後葉より古い型式であり、楽浪土城が前2世紀前葉に始まる可能性からそれより古いものと考え、沖縄出土三稜銅鏃を統一秦期から前漢初頭の前3世紀末から前2世紀初頭のものに絞ることができよう。

5　燕系遺物から見た東シナ海の対外交流

以上の点から見るならば、沖縄の燕系遺物である滑石混入系土器深鉢、明刀

銭、三稜銅鏃は、前3世紀後半～前2世紀初頭に限られるものとすることができる。そしてそれらが燕の遼東を基点としている可能性が高いのである。こうした遺物がまとまって出土する背景が問題となろう。

一つの可能性に、貝交易などの交易が同時期の沖縄と南九州にあったように、沖縄と遼東との間にも交易があった可能性が想定される（小林ほか2013）。しかし、この段階の南島産の文物は燕や遼東では全く存在せず、この想定は成り立たない。また仮に交易があったとしても、その燕系遺物の時期幅は限られたものであり、この様な長距離の交易を行う必然性が存在しない。今のところ、一方向の文化交流でしかないのである。

図1に示したように、滑石混入系土器深鉢は沖縄本島西南部の海岸部の遺跡から、明刀銭や三稜銅鏃は同じく沖縄本島の西南部の内陸部から東南部の海岸部に分布しているといえよう。土器は遼東から漂着ないし到着した沖縄本島西南部の海岸部に出土し、明刀銭や三稜銅鏃はそこから東南に向けた内陸部に出土している。漂着した移民達が西南部海岸部に上陸し、まもなく内陸部から東南部に移動していったようにも見受けることができる。あるいは沖縄西南部海岸部と西南部内陸部ないし東南部海岸部の社会集団との交易によって、後者に明刀銭や三稜銅鏃がもたらされた可能性があろう。燕系遺物は、その遺物分布からも、遼東から船による漂着のような一方向的な文化流入を考えることができる。

燕の滅亡期（前222年）あるいは衛満朝鮮建国期（前195年）は、遼東の移民が清川江を越えて朝鮮半島北部に逃避した段階にあたる。すなわち、前3世紀後葉～前2世紀初頭ということできる。特に後者の段階には『史記』巻百十五「朝鮮列伝」「満亡命、聚黨千餘人。」と記載され、多くの遼東移民がいたことが知られる。これら沖縄で発見された燕系遺物は、遼東の移民が海路を利用し朝鮮半島西北部を目指して避難した際に、海流に流されて沖縄諸島に到達した可能性を考えることができる。また、『史記』巻百十八「淮南衡山列伝」にある「秦皇帝大說，遣振男女三千人，資之五穀種種百工而行。徐福得平原廣澤，止王不來。」という、いわゆる徐福伝説が気になるところである。振う男

女三千人が燕あるいは遼東の民であることを論証することはできないが、年代的には一致している。しかしながら、燕系遺物の年代幅からも、燕滅亡時や衛満朝鮮建国期という複数回の遼東移民である可能性が最も高いものであると言えよう。

また、これら沖縄の燕系遺物が共伴する九州系土器は、九州南部の土器であり、弥生前期後半から中期前半にかけてのものであり、特に中期前葉の入来Ⅰ式段階の共伴例が多い。北部九州で言えば、弥生中期前葉の城ノ越式段階であり、この段階の年代の1点が前3世紀後半から前2世紀初頭であるということができるであろう。弥生前期末・中期初頭を、前300年を上限とする前3世紀と考える私の年代観（宮本2008）とも矛盾しないものである。

さて、宮崎県串間市では、直系33.3cmという大型の玉璧とともにその近くから明刀銭が出土したと伝承されている。玉璧の類例は前2世紀の広州市南越王墓のものにあり、明刀銭も沖縄出土のものと同じ前3世紀後半のものである（岡村2013）。沖縄本島では弥生時代前期後半から中期にかけてゴホウラなどの南島産大型貝が南九州との間で交易され（木下1996、新里2009）、さらに南島産大型貝は北部九州へもたらされている。南九州はその中継交易基地であったのである。そうした南九州の交易者は、沖縄出土弥生土器から薩摩半島西部の人々であると考えられている（中園2000）。薩摩半島西部の中継交易地を媒介として、沖縄本島に遼東から漂着した玉璧や明刀銭が南九州内での交易関係の中で、大隅半島南端の串間市にもたらされた可能性があろう。あるいは、大隅半島の人々も沖縄本島との中継交易に参加し、直接玉璧や明刀銭を入手した可能性もあろう。どちらにしろ、伝串間市出土の玉璧や明刀銭が実際の出土品であったとすれば、それらは遼東から沖縄にもたらされたものが、二次的に大隅半島南端に流入したものであったのである。

謝辞

本稿をなすにあたって資料調査を行った東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室、京都大学総合博物館、沖縄県立博物館、詠谷村立歴史民俗資料館、浦添市教育委員会、宜野湾市教育委員会、ならびに資料調査の便宜や様々なご教示とともに文献の手配をして頂いた

大貫静夫、池田栄史、鄭仁盛、阪口英毅、仲宗根求、菅原広史、片桐千亜紀、森田直哉、新里貴之、石川岳彦の各先生・各位に感謝申し上げる。最後に沖縄本島での資料調査を逍遙され同行された小林青樹、久我谷渓太の御両名に深甚の謝意を表したい。

注

(1)　鹿児島大学新里貴之さんのご教示による。
(2)　燕下都工作站の展示室に陳列される燕式釜には、型作り痕跡を持つものが一点あることを、実見により確認した。

参考文献

浦添市教育委員会1993『嘉門貝塚B　牧港補給地区開発工事に伴う緊急・発掘調査報告書』浦添市文化財調査報告書第21集

大城剛1990「沖縄県具志川市宇堅貝塚群発掘調査概要」『考古学ジャーナル』No.322、17-21頁。

大貫静夫編2007『遼寧を中心とする東北アジア古代史の再構成』平成16-18年度科研費基盤研究（B）研究成果報告書、東京大学人文社会系研究科

大貫静夫・鄭仁盛・石川岳彦・中村亜希子・古澤義久2008「牧羊城をめぐる諸問題」『中国考古学』第7号、77-96頁。

岡村秀典2013「漢王朝と倭」『弥生時代政治社会構造論』雄山閣、7-19頁。

河北省文物研究所1996『燕下都』文物出版社

木下尚子1996『南東貝文化の研究』法政大学出版局

小田富士雄2000「沖縄の「弥生時代」と外来遺物」『高宮廣衛先生古稀記念論集　琉球・東アジアの人と文化（上巻）』高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会、95-110頁。

宜野湾市教育委員会編1989「真志喜荒地原第一遺跡」『土に埋もれた宜野湾』宜野湾市文化財調査報告書第10集、85頁。

小林青樹・宮本一夫・伊東慎二・新里貴之・石川岳彦・久我谷渓太2013「沖縄諸島における弥生文化併行期の大陸系資料の再検討」『一般社団法人　日本考古学協会第79回総会研究発表要旨』、166-167頁。

白井克也2001「勒島貿易と春の辻貿易―粘土帯土器・三韓土器・楽浪土器からみた弥生時代の交易―」『第49回埋蔵文化財研究集会　弥生時代の交易―モノの動きとその担い手―』埋蔵文化財研究会第49回研究集会実行委員会、157-176頁。

下地安広1999「沖縄嘉門貝塚出土の楽浪系土器」『人類史研究』第11号、17-24頁。

新里貴之1999「南西諸島における弥生併行期の土器」『人類史研究』第11号、75-106頁。

新里貴之2009「貝塚後期文化と弥生文化」『弥生文化の輪郭　弥生時代の考古学第1巻』同成社、148-164頁。

石永士・王素芳1983「試論"明"字刀化的幾個問題」『考古与文物』1983年第6期、79-101頁。

石永士・石磊1996『燕下都東周貨幣聚珍』文物出版社

高宮廣衛1978「沖縄諸島における新石器時代の編年（試案）」『南島考古』第6号、11-22頁。

谷豊信1986「楽浪土城出土の土器（下）―楽浪土城研究その4」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第5号、73-120頁。
中国社会科学院考古研究所1980『満城漢墓発掘報告』文物出版社
鄭仁盛2002「楽浪土城の青銅鏃」『東京大学考古学研究室研究紀要』第17号、79-112頁。
鄭仁盛2004「楽浪土城의「滑石混入系」土器와ユ年代」『百済研究』第40輯、1-31頁。
鄭仁盛2011「中心과周辺의観点에서본辰・弁韓과瓦質土器의成立」『考古学에서의中心과周辺』（第20回嶺南考古学会学術発表会）、55-96頁。
東亞考古学会1931『牧羊城　南満州老鉄山麓漢及漢以前遺蹟』（東方考古学叢刊第二冊）
當眞嗣一1997「具志頭城北東崖下洞穴内で発見された明刀銭について」『沖縄県立博物館紀要』第23号、97-110頁。
仲座久宣・羽方誠2011「八重瀬町新里洞穴遺跡で採集された銅鏃」『沖縄県立博物館・美術館、博物館紀要』第4号、7-10頁。
仲宗根求・西銘章・宮城弘樹・安座間充2001「読谷村出土の弥生土器・弥生系土器について」『詠谷村立歴史民俗資料館紀要』第25号、59-79頁。
仲宗根求・小原裕也2006「平成17年度浜屋原貝塚Ｂ地点発掘調査の概報」『詠谷村立歴史民俗資料館紀要』第30号、51-65頁。
中園聡1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第8号、104-119頁。
中園聡2000「沖縄諸島出土の九州系弥生土器―様式の同定と解釈―」『高宮廣衛先生古稀記念論集　琉球・東アジアの人と文化（上巻）』、高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会、111-130頁。
中村亜希子2012「瓦の東方伝播―楽浪瓦の再検討―」『中国考古学』第12号、85-108頁
橋本増吉1928「沖縄懸那覇市外城岳貝塚出土の明刀について」『史学』第7巻第1号、135-140頁
藤尾慎一郎1993「南九州の突帯文土器」『鹿児島考古』第27号、22-38頁。
古澤義久2010「中国東北地方・韓半島西北部における戦国・秦・漢初代の方孔円銭の展開」『古文化談叢』第64集、129-173頁。
宮本一夫2004「中国の戦国・漢代の甕棺墓と朝鮮半島の甕棺墓」『考古論集（河瀬正利先生退官紀年論文集）』、河瀬正利先生退官記念刊行会、1003-1018頁。
宮本一夫2008「遼東の遼寧式銅剣から弥生の年代を考える」『史淵』第145輯、155-190頁。
宮本一夫2012「楽浪土器の成立と拡散―花盆形土器を中心として―」『史淵』第149輯、1-30頁。
宮本一夫2013「有銎銅鏃の編年とその東北アジア青銅器文化における位置づけ」『技術と交流の考古学』、同成社、310-323頁。